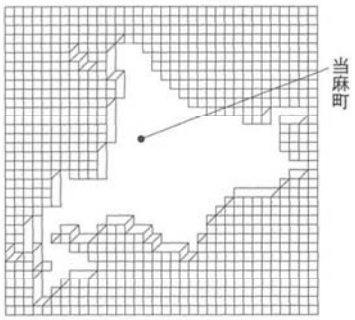
連　載



あのマチ　このムラ　・地域おこし活躍中

No.16

当麻町の事例

―有機栽培米と野菜の複合経営に賭ける―

◇当麻町の環境条件

旭川を出発して、国道三九号線を北上すると、最初の町が当麻である。明るい田園風景と整備された公園、とうまスポーツランドはテニスコートや野球場の他にフィールドアスレチック、そして自然景観にとけ込んだキャンプ場があり、町内外の多くの家族連れでにぎわっている。バビオンシャトーでは通年で蝶の生態を観察でき、隣接するヘルシーシャトーで汗を流せば一日の活動の疲れも吹き飛ぶ。勿論、石柱、石筍からなり、神秘的景観を呈している当麻鍾乳洞の散策は、天然冷蔵庫として夏にはもってこいである。こんな所に暮らしてみたいと思わせる道内では数少ない町の一つと言える。

当麻町は上川盆地の東隅にあって大雪の山並みに接し、海抜は平均で一五〇㍍、西は石狩川を隔てて比布町、南は旭川市永山町、北は愛別町に接している。地質は平坦地帯の大部分は埴質壌土で泥炭土質が多いが、石狩川にそって沖積土、砂質壌土となっており、中央を流れる神水川流域には黒色土地帯もある。大雪に連なる丘陵地帯は概ね埴質壌土でまれに火山灰土もある。地味肥沃にして耕作に適し、気候適順にして上川米の主産地として知られている。

上川の気候は、気候区的にはいわゆる「日本海面区」に属するが、地形上から上川独特の内陸的気候様相を呈しており、冬季は寒気が厳しく一方夏期は高温で、共に全

当麻町農家数の推移　　単位：戸

	昭和45年	50年	55年	60年	平成１年	平成４年	平成９年
専業農家	790	333	214	253	287	184	191
第１種兼業	569	625	732	562	498	460	394
第２種兼業	121	371	285	336	259	268	253
合　計	1,480	1,329	1,231	1,151	1,044	912	838

農産物の生産額の推移　　単位：百万円

年　次	総　額	米	麦　類	雑穀・豆	野　菜	花　卉	工芸作物	その他
昭和５５年	4,137	3,128	128	191	464	77	138	11
昭和６０年	4,792	3,393	370	124	639	183	36	47
平成元年	5,045	3,337	296	174	821	370	38	9
平成４年	5,434	3,941	82	93	848	315	34	11
平成８年	5,620	4,246	13	82	868	390	19	2

道の一位を占める。春、秋の気候の急変、霜害の心配と言った農業にとって厳しい条件ももたらすが、冬季間の降雪が雪解けと共に田植え期の用水確保になり、夏期における昼夜の温度格差の著しい差異は、糖分の蓄積によるおいしい農作物の生産に寄与している。

◇当麻町開墾の歴史

当麻町の地名の由来はアイヌ語「トウ・オマ」から来ており、この言葉は〝沼地〟を意味する。石狩川をはじめ牛朱別川、当麻川、清水川と言った多くの河川が町内を流れ、至る所に沼や湿地があり、先住民は主に熊、鹿を主とする狩猟で生活していた。

明治当初から、これらアイヌの人々との交易のために移り住んだ倭人はいたが、当麻町の開墾の歴史は明治二十六年屯田兵の移住から始まった。

彼らは一人当たり約一町歩の新墾地を割り当てられ約四〇〇人が入植した。しかしふた抱えもあるような大木の伐採や熊笹の生い茂る原野の開発は大変で粟、イナキビ、蕎麦等を播種したが収穫は微々たるものであった。

稲作については、開墾の当初から自然環境が水稲には不適であるとされた。府県から持ち込んだ当時の品種では所詮無理と判断された。そして屯田兵の中隊においても、米は贅沢品であるとの理由から稲作抑制指導がなされた。しかしそれにも関わらず、稲作に対する様々な努力が積み重ねられて着実に増産してきた。やはり米に対する日本人の独特の執着心の現れと見える。一九年後の明治三十二年には既に二六〇町歩の作付の記録が残されている。

その後、明治三十三年永山町から分離、上川地方の水田単作地帯の中心となっていった。

昭和二十年敗戦による軍関係復員者を主体として外地引揚者、村内入植希望者などと共に開明、緑郷地区の国有未開地六千町歩に緊急開拓が実施されたが、これによって現在に至る当麻町農業の基盤が出来上がった。

◇規模拡大のパターン

昭和三十年代から始まった経済高度成長の波はここ当麻にも波及し、農業の近代化に伴う機械化は弱小農家の離農を促進し、これに昭和四十五年から始まった米の生産調整等の政治政策が追い討ちをかけた結果、昭和四十～五十年にかけて農家戸数は千六百戸～千三百戸へと二〇％近く減少した。

また旭川に近いと言う地理的要素もあって兼業化も急速に進み、現在は農家全体の八〇％を越えている。これに伴い、離農跡地の吸収、及び兼業で経営面積維持に困難を

◀JA当麻ライスセンター

◀とうま野菜加工センター

きたす農家に対応するために近隣農家がその農地を吸収する形で経営規模拡大が見られる。

九五年センサスでは一五㌶を越える大規模経営の農家が四四戸であるが、当麻町の特異な傾向として自作地拡大型農家と借地拡大型農家が混在するという点である。ちなみにこの四四戸の内、借地が六〇％以上の農家が一二戸、四〇～六〇％すなわち半々の農家が二二戸、そして自作地主体の経営が一〇戸となっている。

米価の下落、減反強化と言った稲作経営にとってマイナス要因が多い昨今ではあるが、今後、コストダウンを指向して、更に規模拡大を目指すときの参考として、それぞれの経営形態における問題点を洗い出す作業も必要と考えられ、この点で当麻町の大規模農家の経営分析は興味深い。

◇「日本一スポーツ活動の町」

当麻町は、町民みんながスポーツに親しみ、スポーツを通して健全な地域社会を育成する事を目的に、「日本一スポーツ活動の町」宣言をしている。この推進のために、とうまスポーツランドを中心にグリーンヒル運動場、野球場、テニスコート、ゲートボールコート、屋内体育館などのスポーツ施設の他、フィールドアスレチック、スキー場、キャンプ場といったアウトドア施設やスカイスポーツ、デュアスロンなどのスポーツイベントの開催やオリジナルスポーツであるフィールドボールを考案し普及に努めている。

▶とっとき米

このスポーツ活動すなわち〝健康〟がキーワードとなって当麻の基幹産業である農産物生産に結びついたのが有機栽培による「とっとき米」であり、こだわりの青果物と考えるのはつがちすぎだろうか。

◇デンスケスイカ

昭和五十九年、農協青年部の一人が、町に立ち寄った種子業者から、ヨーロッパの黒皮スイカと日本の縞皮スイカを交配させた種子を紹介され「これはおもしろい」と作り始めた。

まん丸で色が黒くユーモラスなところが故大宮敏光の〝デンスケ〟のイメージと、ちょうど減反による転作を助ける、すなわち「田助」の語呂合わせで銘々した。鮮やかな紅色の果肉と、甘くてジューシ

▶野菜・花卉集荷場

ーな味に対する評価は、厳密な品質管理と出荷基準を守ることにより実現されており、ブランドの確立が市場による価格変動の影響を最小限に止める良い例となっている。

これに合わせて、当麻町では〝あずまメロン〟、アスパラ、トマト、キュウリ、とうきび、栗あじかぼちゃ、馬鈴薯等の特産化を進め、水田転作対応策そして農家の所得確保策にしようと力を入れている。米のおかれている困難な状況と正面から取り組む「とっとき米」の展開と合わせて、当麻町農業の生き残りを賭ているのがこの特産化戦略と言える。

平成十年四月に「道の駅」としてオープンした〝でんすけさんの家〟はこれら特産品の販売拠点であり、実験店でもある。

◇グリーンライフ研究会

「とっとき米」誕生の原点となったのが〝グリーンライフ研究会〟である。会の設立は平成二年、当初は五〇戸の農家でスタートした。減農薬減化学肥料で慣行栽培の半分という比較的単純で緩い基準のもとに展開してきた。取扱量も当初は七七一戸の消費者に一、三四九俵の実績であったものが、平成五、六年の米不足時には注文もどっと集まって、約二万戸の家庭に三万俵を出荷したが、その対応の為に二四〇戸ほどから集荷することになった。中には必ずしも研究会の主旨に賛同する生産者ばかりではなく、消費者との信頼関係を危うくする要素を含んだ実績となった。

事前に消費者との間で直接契約を結び、カントリーエレベーターで常温乾燥した米を籾で貯蔵し、出荷直前に籾すり精米する事で米の鮮度にこだわっている。今では当たり前のようになってきた直前精米に早くも平成の初めから取り組んできた、そのことが現在、米余りの中で、これからブランドを確立して顧客確保等の販売展開をしなければならない、多くの他地区との違いである。現在の最大の課題は、いかに生産基準を徹底し、おいしさは勿論〝安全〟〝安心〟と言う消費者の信頼を強めていくかが鍵となってくる。拡大指向の反省と信頼強化の一環として、平成九年から完全無農薬、完全無化学肥料のプレミアムグレードの「とっとき米」を、ほしのゆめで生産開始した。肥料は有機一〇〇%のぼかし肥料、除草は機械又は人力で行い一部は合鴨の導入も行われている。病害虫には木酢等で対応する等のこだわりの商品である。

㈲当麻グリーンライフの瀬川社長（右）と石田営農部長（左）

現在会員は四、八〇〇戸この内地元旭川圏が三〇%、札幌圏が三〇%を占め、残りの四〇%が東京他の府県の会員となっている。これらの会員に対し現在五種類の「とっとき米」とシイタケ、有機野菜を提供している。商品管理と各種啓蒙イベント等の充実のために平成一〇年、一二戸の組合員で法人化を図っている。

◇堆肥センターの設置

また、酪農・畜産農家がほとんど無いにもかかわらず処理量年間三六〇〇トン規模の堆肥センターを稼働させている。原料となる牛糞、鶏糞は近隣農協から調達して管内土づくりの為の投資を行っているが、これも当麻町の「健康」と言うコンセプトの一環であろう。

このように、あくまで米を中心としながらも激動する農業情勢に対応し、産地当麻として生き残るための布石を打っている。これらは一見バラバラに見えるが町、農協、そして農家組織それぞれがその持てる機能を発揮するときに、他では見られない「健康」を柱とした農業振興が結実する。そんな期待を抱かせる町である。

レポーター　専任研究員　斉藤勝雄